



中高生とともに差別と闘う

「違ってる、楽しい！」

吉成タダシ



前号で、数学の授業と人権との関わりについてお話をしました。いざ人権・差別問題に直面したとき、黙って見過ごすことのないように、日常的に自分の思いを述べられるような授業を、数学の時間でも当たり前に取り組んでいく必要がある、ということ。その「発表」ということについてもう少し。

聞くことと応えること

私はたいいてい、子どもの発表を復唱しません。声があまりに小さかったり、分かりにくかったりした場合は訊き返すこともありすが、たとえ声が小さくてもその声を尊重したいので、復唱はしません。それに教員が復唱していると、「あとで先生が言ってくれる」ことが前提となり、友達の発表を真剣に聞こうとしないくなる恐れもあります。

そしてそのうえで、もし発表が「聞こえない」とときには、「もう一回お願いします」と応える。

自分の考えと「同じ」ならば、「同じです」と応える。

自分の考えと「違う」とときには、「違います」と応えて手を挙げ、自分の考えを述べる。

そういったなかから、人の話を聞く心構えや、人に気持ちを伝える気構えが生まれていくように思います。そんな日常的なやりとりを大事にしていくことが、人権学習など、「いざ」というときに役立つのではないかと思うのです。

「違ってる、楽しい！」

「違います」という意見が出てきたとき、面白い場面が見られることがあります。

「違います」と言った子が自分の意見（解答）を発表します。けどそれにもまた、「違います」と言う子が何人も現れます。それに対してまた、「違います」と言う子が現れます。「違います」のオンパレードです。

子ども達は、いったいどれが正解なのか分からなくなってしまう。そのうち自分達で、あーだこーだと正解を見つけはじめます。そのとき、困惑しているはずなのですが、なぜか子ども達は楽しそうな笑顔。そんな表情を見て、私もまた笑顔。だって、子ども達のやりとりが、見えて本当に楽しそうなんです。

結局どうしようもなくなつて、「先生、正解はどれですか？」と訊いてくるので解説するのですが、

でも、正解は簡単に教えない方がいいです。多少時間はかかっても、自分達で答えを見つけ出すことが、子ども達にとつては楽しいのです。そして同時に、

「違つたって何のその！」

「違うのは自分だけじゃない！」

「違つたことなんて当たり前！」

「違えばみんな直せばいい！」

「違つて、楽しい！」

こんなふう感じられれば、「違つたことへの抵抗感の角が少し丸くなり、教室の空気がちよっぴり軽くなるのではないかと思います。」

「対立」ではなく「対話」

いじめも差別も、世の中は間違いだらけです。でもそれがなかなか言えなかったりします。けどちよっぴり、「おかしい」と思ったことには、「おかしい」と、「間違つてる」と思つたことには、「間違つてる」と言えるようになってほしいものです。そしてそれぞれの考えや意見を素直に述べ合い、互いの主張を知つたうえで、「対立」するのではなく、「対話」という関係性をつくれる人であつてほしいなと思います。

子ども達に限らずですが、人はどこかで、敵対する対象を見つけては攻撃し、対立の構図に持ち込もうとする一面があります。それがさもカッコイイことであるかのように。

「あいつのココがおかしい。許せない。だからやつつけてやる！」

私にもそういう一面はあります。どうしても対立の構図しか考えられない場合は、

でも、多くの場合がそうではなくて、やはり「対話」の扉を開けておくこと、必要以上に敵視しないことだと思えます。たとえ今は分かり合えなくても、「対話」の土俵にさえ上つていけば、いつか分かり合えるときが来るかもしれない。分かり合うつもりのない「対立」は、本当に不毛です。やはり、「対立」ではなく、「対話」をめざすことです。「対話」という関係性をつくらうとすること、諦めない人になっていくことだと思えます。

先生代行に白旗

授業場面では他にも、みんなで話し合いをしたり、みんなの前で解法を解説したりする場面や、しゃべるのが苦手な子には、黒板に問題を解きに行く場面をつくるのも動きがあつて面白いものです。

また、ペアや班で話し合いや教え合いをしながら問題に取り組むのも自己表現力がついていると思います。実は教え合うということについて、私は初めから白旗を揚げています。

「私がみんなに一人ずつ付いていられればいいんだけど、そういうわけにはいかないから、私の代わりにみんなが先生になってほしい。」

そう言つておけば、

「よし！じゃあやつてやるかー」と、勇んで先生代行をしてくれる子が登場してきます。

「明らかにプロの私の説明の方が的確で解りやすいだろう」と思つても、隣の子が、「これがあれでこうだからこう」という指示語ばかりの方が、「解つた！」となることもあるものです。これはさすがにショックで、「えええーっ！あんなに解りやすく言つたのに！」と、結構凹んだりもします。けど、そもそも教師然とした小難しい説明ではなく、子ども達の文化に合った説明の方が入っていきやすいのでしようね。

「えええーっ！それで解つたのー?!」と言つたときの、教えた子の得意満面なドヤ顔。目に浮かびませんか。